

英領インドにおける岡倉天心のブッダガヤ訪問について スワミー・ヴィヴェーカーナンダとラビンドラナート・タゴールとの交流から

外川昌彦

Okakura Tenshin (Kakuzō) at Bodh Gaya during His Stay in British India Examination Using the Records Exchanged between Swami Vivekananda and Rabindranath Tagore

TOGAWA, Masahiko

Okakura Tenshin (Kakuzō) was an art historian and intellectual in the Meiji era, who played a significant role in introducing Japanese culture to the Western world. This paper focuses on his visits to Bodh Gaya during his stay in India for nine months in 1902. It is well known that during his stay he formed a close relationship with Indian intellectuals such as Swami Vivekananda and Rabindranath Tagore, and completed his book, *The Ideals of the East* with an introductory note by Sister Nivedita, of which his opening phrase of 'Asia is one' became very popular in later periods in Japan.

The documents examined in this paper reveal that he visited Bodh Gaya three times, with one week stays for the first and second times, and proposed to the mahant of Bodh Gaya temple to purchase a plot of land for a guest house for Japanese pilgrims.

Even though the biographies of Okakura Tenshin so far have not scrutinized various details about his visits to Bodh Gaya enough, the fact that there is no other place Okakura visited in such a frequency during his stays in India implies his concerns about the situation of Bodh Gaya temple, at which Anagarika Dharmapala had launched his worldwide Buddhist revivalist movement in 1891, without having achieved its expected outcomes.

Another issue to be examined in this paper is about his involvement in the secret societies of revolutionary movements, such as Anushilan Samiti, during his stays in India. It is well known that the investigation office of the Bengal government at that time reported that Okakura had been involved in revolutionary societies, but many scholars have cast doubt if it is historical fact that he caused some actual results in the political movement.

This paper is an attempt to cast new light over his experiences in India using the historical materials of the Ramakrishna Mission, Rabindranath Tagore, and British officials, and to examine his intention to visit the Bodh

Keywords: Okakura Tenshin (Kakuzō), Bengal, Swami Vivekananda, Tagore, British India

キーワード: 岡倉天心, ベンガル, ヴィヴェーカーナンダ, タゴール, 英領インド

Gaya temple—the center for Buddhist revivalist movement during the British Indian period.

- | | |
|---------------------------------|----------------------|
| 1 天心とブッダガヤ | (1) マハントとの対話 |
| 2 シュレンドロナトの回想記—第二回ブッダガヤ訪問 | (2) マハント僧院の生活 |
| 3 ノレシュチョンドロ・ゴーシュの回想記—第一回ブッダガヤ訪問 | (3) 日本の仏像 |
| (1) カーゾン総督の照会状 | 5 タゴールの書簡—第三回ブッダガヤ訪問 |
| (2) 僧院長マハントの歓待 | 6 イギリス植民地政府との交渉 |
| 4 マハントの僧院にて | (1) 売却申請の却下 |
| | (2) イギリス植民地政府の対応 |
| | 7 まとめ |

1 天心とブッダガヤ

本稿は、東洋美術史家・岡倉天心（覚三）による、1902年の英領インド・ブッダガヤへの訪問の経緯を検証することで、インド滞在中の天心の活動に新たな光をあてようとするものである。9か月に及ぶインド滞在中に、天心は度々ブッダガヤを訪問するが、これまで史料上の制約もあり、その詳細は十分には検証されてこなかった。本稿では、既存の天心の伝記的研究に加え、ラーマクリシュナ教団やタゴール家の関連史料、イギリス植民地政府の公文書などのインド側の史料を対比して検証することで、天心によるブッダガヤ訪問の意図とその背景を明らかにしようとしている。

岡倉天心の1902年の渡印については、これまで主にアジャンター・エローラなどの仏跡探訪への美術史的な関心から理解され、これとは別に、日本美術院の経営悪化や私生活の破たんと逃避行が、その背景には指摘されてきた¹⁾。しかし、ヴィヴェーカーナンダやタゴールらの当時のインド知識人との交流の経緯をたどると、その学術的な関心や私生活

の問題とは別に、近代インドの仏教復興運動を背景とした、天心のブッダガヤへの関心が浮き彫りにされると考えられる。

もちろん、仏教文化の源流としてのアジャンター・エローラなどの仏跡探訪の経験が、天心に、奈良の法隆寺から中国の竜門石窟へと広がる汎アジア的な仏教文化の結びつきを構想させたことは間違いない。「アジアはひとつつなり」の言葉で知られる『東洋の理想』など、インドでの体験は、その後の著述活動に大きな意味を与えることになる。

しかし、本稿で検証する天心のブッダガヤ訪問の経緯を見ると、近代インドのヒンドゥー教改革運動を先導するスワミー・ヴィヴェーカーナンダ (Swami Vivekananda, ベンガル語ではシャミ・ビベカノンド) や、ノーベル賞詩人のラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore, ロビンドロナト・タクル) との親交を深め、国際的な仏教復興運動をリードするアナガリーカ・ダルマパラー (Anagarika Dharmapala) との接点を持ち、またカーゾン総督をはじめとするイギリス植民地当局との交渉が見られるなど、様々な背景をそこに見出すことが可能である。

1) たとえば、岡倉古志郎は、天心の主要な伝記作者の議論を整理して、そのインド訪問の動機に、次の3点をあげている [岡倉 1987]。すなわち、第一は、美術研究者としての研究意欲、第二は、日本の仏教界のインドへの関心の高まり、第三は、天心の身辺の事態の悪化というネガティブな動機である。

実際、9か月間のインド滞在で、アジャンター石窟からパンジャブ州のアムリットサルまで、貪欲にインド亜大陸の史跡を巡り歩いた天心が、しかし、本稿の史料に従えば、ひとつの場所を3度に渡り訪れたのはブッダガヤだけであり、それは天心にとって、インドの活動でも特別な意味を帯びるものであったと考えられる。しかし、その詳細は後述のシュレンドロナト (Surendranath Tagore) の回想記などの断片的なものに留まり、なお検証すべき課題として残されていたと言えるだろう。

天心のブッダガヤとの関わりについて、既存の天心の伝記的研究を見てゆくと、これまで最もまとまった論評を行ったものとして、戦前の清見陸郎の研究をあげることができる。戦時中の昭和19年に刊行された清見[1944]の『天心岡倉覺三』は、「大アジア主義の先覚」としての天心を顕彰しようとする視点が見られ、戦後はあまり参照されることがなかったが、しかし、関係者への聞き取りも含む同時代の一次資料を用いた天心の活動の検証として、示唆に富む内容を含んでいる²⁾。その中でも、特にブッダガヤとの関わりについて、清見は、次のように述べている³⁾。

ブッダガヤは、釈迦が正覚を得たる場所として、仏教徒の四大聖地の一つとされている。さればここへは、インド四隣の各地方から仏教の篤信者らが巡礼し来り、たとえば、ビルマ人ならビルマ人だけの、セイロン島人ならセイロン島人だけの宿泊所を立派に設けているのに、アジアの指導者をもってみずからを任せんとし、かつ最も輝かしき同教の継承者であるはずの日本人に至っては、ここを訪るものまことに寥々たるばかりか、専用の宿泊所の如きは影も形

もないのである。…天心は頗るこれを遺憾となし、取りあえずこの種の宿舎をこの地に建設することによって、日本仏教徒の渡印を促進しようと考えたのだった。そこで同地のマハントに故国から携行した美術品などを贈ってその歓心を得、適当な敷地の買入れ方について斡旋を請うた。マハントは快諾し、早速その願書を州庁に提出することになった。…事成れりとして天心らは喜んでカルカッタへ引き上げたところ、やがてブッダガヤのマハントからの来簡は、意外にも断り状だった。同地の州庁では、その土地が結局日本人の手に渡るものであることを探知し、マハントを呼び出し、天心らに譲渡することを厳禁したという。天心は怒って総督府の外務部に抗議を提出したが、同部からの回答は売り下げ禁止の命令など発したおぼえなしのことだった。…

ここで清見は、渡印して間もない天心が、ブッダガヤにおける日本人巡礼者の宿泊所建設のために奔走する姿を描いている。当時のブッダガヤには、1870年代にビルマのミンドン王によって建設されたいわゆるビルマ・レストハウスがあり、ダルマパララの大菩提協会 (Maha-Bodhi Society) による新たなレストハウスの建設計画も進められていたが、なお十分な宿泊施設は整備されていなかった⁴⁾。

ブッダガヤを訪れた天心一行も、手狭なビルマ・レストハウスに滞在することはできず、後に見るように、ヒンドゥー教シヴァ派の教団であり、ブッダガヤ寺院の地権者でもある僧院領主マハントの邸宅に客人として滞在した。清見によれば、この時に天心は、僧院領主として関連地所の管理を一手に握るマハントにかけ合い、レストハウスのための土

2) 「大アジア主義の先覚」については、清見[1944]の「序言」を参照されたい。

3) 清見[1944: 205-207]。

4) ブッダガヤでの大菩提協会の活動とビルマ・レストハウスをめぐる状況、その後の新たなレストハウス建設の経緯については、拙稿を参照されたい[外川2016]。

地売却の承諾を得ると、マハントを通してイギリス植民地政庁に売却の許可を願い出た、というのである。

ここで興味深いのは、その後の天心の土地買い取り計画の顛末であるが、政府は外国人への売却を認めず、マハントは天心に断りの手紙を出すのだが、それに怒った天心が総督府に抗議をすると、「売り下げ禁止の命令など発したおぼえなし」と、回答されることである。

この点について清見は、天心と同時期にチベットとインドに滞在し、晩年には東洋文庫で仕事をする河口慧海への聞き取りを行っているが、その河口の見立てに従えば、実際にはそれは、「マハント自身のあざとい計略から出たこと」だとされる⁵⁾。すなわちマハントは、日本から来た天心の依頼を断れず、しかし、イギリス官憲にも睨まれたくないという板挟みの状況で、お上には逆らえない優柔不断なインド人が、一度は快諾した売却を、「上司の命令に藉口して、上手に逃げしまった」と、説明する。

英領支配の苦境にあえぐインド人というこのマハントのエピソードを下敷きにすることで、清見は、インド滞在中に天心が構想した『東洋の覚醒』に込められた、西洋の植民地支配の打破とアジアの連帯を訴えるメッセージが、当時のインドの若者に、どれだけ大きなインパクトを与えたのかを論じてゆくのである⁶⁾。

その後、天心のインドでの体験を取り上げた伝記的研究は多いが、ブッダガヤ訪問の詳細について、清見のような検証を行った研究は限られている。

たとえば、1978年に公開され、天心のインド滞在の最も詳細な史料とされる堀至徳日記では、4月に天心とブッダガヤを訪問した記事は見られるが、土地取得の経緯などには触れていない⁷⁾。堀至徳日記に依拠し、天心のインドでの活動を体系的に考察したことで知られる堀岡 [1982: 72-110] も、そのためブッダガヤ訪問の検証は限定されており、堀岡の言葉を引用すれば、「この巡礼村の計画は、織田得能と計画して日本で行うはずだった東洋仏教会議と関連していたものかどうか、あるいは一行のブッダガヤ行き、および僧院長との会見の主旨は巡礼村の実現工作のためであったのかどうか、現在の時点では不明である。」と、記すに留まっている。

その後の伝記的研究を見ても、たとえば『岡倉天心全集』の年譜では、ブッダガヤ訪問を1月と4月の2度とし、その詳細には触れておらず、近年の天心研究の成果を編纂した岡倉・岡本・宮瀧 [2013] も、インドの現地語を用いた研究の「機運」には触れているが、「般若波羅蜜多会」を取り上げる岡本 [2013] の論考などを除けば、やはりインドでの具体的な活動の検証は限られていると言えるだろう⁸⁾。

このような中で、戦前の清見の研究は、シュ

-
- 5) 清見 [1944: 207]。1900年7月に極秘裏にチベットに潜入した河口慧海は、1902年5月にインドに戻り、翌年4月に帰国するまで、インドに滞在する。
 - 6) 『東洋の覚醒』は、天心がインドから持ち帰った英文の草稿がその死後に発見され、関係者がそれを日本語に翻訳、刊行したものである。本稿では、通称として親しまれている『東洋の覚醒』を題目に採用しているが、必ずしも天心が、このような題目の書物を出版している訳ではない。
 - 7) 春日井 [1971-2]。インド留学のため、天心の渡印に同行した真言宗の留学僧・堀至徳が残した日記は、特に天心と同伴した旅の前半部分に詳細な記録が見られる。しかし、体調不良の堀は、1月にはカルカッタに留まり、ブッダガヤへの天心の訪問に関しては、4月に天心に同伴した記事が見られるだけで、土地取得の経緯などの詳細は記録されていない。
 - 8) 岡倉天心のインド滞在与インド社会との交流については、近年、様々な形で再検討が行われている。堀岡 [1974; 1982] の先駆的研究に加えて、近年では、稲賀 [2002; 2005; 2014]、岡倉 [2006; 2013]、岡倉登志・岡本佳子・宮瀧交二 [2013]、岡本 [2008; 2013; 2014] などの多様な成果を通して、その再評価が進められている。特に、仏教を通じた天心のヴィヴェーカーナンダとの交流については、平野久仁子 [2013]、岡本佳子 [2014] などが最新の知見を紹介する。インド側の

レンドロナトの回想記に加えて、天心と同時期のカルカッタに滞在し、タゴール家にも出入りした河口慧海への聞き取りに基づくことで、当時の状況を検証するものとして注目される。逆に言うと、インド知識人と天心との交流の意義を論じる研究は多いが、堀至徳日記の発掘以降、それを越える有力な史料の発掘は見られなかったため、その詳細な経緯や現地社会に与えた影響の広がりについて、検証する研究は限られていたと言えるだろう。

天心のインドでの活動に関するもう一つの論点は、天心の革命運動との関わりをめぐる議論である。これまで、インドとの関わりに注目する日本での伝記的研究や、タゴール家との関わりを通して言及されるインド側の研究では、カルカッタで秘密結社の創設に関わり、インドの独立運動を先導する、革命運動家としての天心像が様々な形で取りざたされてきた⁹⁾。実際、インド革命運動の起源とされる練成会 (Anushilan Samity) がカルカッタで結成されるのは1902年であり、インド独立運動の先駆けとなるスワデシ運動がベンガルで展開されるのは1905年なので、その中で天心が果たした触媒としての役割が、注目されてきたのである。

特に、インド革命運動への天心の関与を示

す根拠として取りざたされてきたのは、ベンガル政府犯罪捜査局の報告書に、秘密結社の創設に関わった人物として、天心の名前が見られることである¹⁰⁾。たとえば、その最も初期の記録である、犯罪捜査局長ダリーの報告書には、以下のような記述が見られる¹¹⁾。

ベンガルの最初の秘密結社は1900年頃に結成されたと信ずるに足る理由がある。秘密の会合は1900年頃にカルカッタで開かれ、法廷弁護士のP. ミットロ、ショロラ・デビ・ゴシャル嬢、そして、オクラという名前の日本人が出席した。この会合で、政府の役人やその支持者を暗殺することを目的とする、秘密結社の設立が決議された。秘密結社は、ベンガルの各地で結成された。

秘密結社の創設に関わるこの天心の記録は、日本では、特に岡倉古志郎 [1987] の紹介によって、広く知られるようになった¹²⁾。とりわけ、『東洋の覚醒』に込められたインドの若者を鼓舞する印象的なメッセージとの結び付きが注目され、その後、天心とインド革命運動との関わりをめぐる様々な議論が展開された¹³⁾。

しかし、このダリー局長の報告書は、1908

／ 史料を用いて天心のインド訪問の経緯を検証する試みとしては、拙稿も参照されたい [外川 2014a; 2014b]。しかし、本文でも触れているように、岡倉天心のブダガヤ訪問に焦点をおいた論考は、これまで非常に限られていたと言えるだろう。

9) たとえば、天心研究の碩学による講演録をまとめた『ワタリウム美術館の岡倉天心・研究会』の各処では、天心の革命運動との結びつきについての様々な言及を見ることができ [ワタリウム美術館 2005]。インド側で見ると、たとえば、現代ベンガル文学を代表するベスト・セラー作家、シュニル・ゴンゴパッダエの歴史小説には、恋多き革命運動家としての天心が登場し、今日のインドで流布される典型的な天心像を見ることができ [Gangopadhyay 1996]。この点については、拙稿も参照されたい [外川 2012]。

10) 革命運動との関わりで天心の名前が言及される記録として良く知られているのはDaly報告である [Daly 1981]。しかし、ベンガルでは、その他にも6点の革命運動の起源と展開に関する捜査報告書が知られており、特にDaly報告の6年後に編集されたJ. C. Nixonの報告書には、後述のように、Daly報告を踏襲した、天心への言及が見られる。

11) [Daly 1981: 14]。1911年のDaly報告は、Sankar Goshによって編集され、1981年にその復刻版が刊行されている。ここでは復刻版を用いた。

12) 日本では、この岡倉古志郎 [1987] の論考が発点となることで、その後、オーロピンド・ゴーシュの証言やシスター・ニヴェディタとの結びつきなど、天心と革命運動をめぐる様々な議論が展開された。

13) 最近でも、たとえば、金子 [2007: 215] は、白田 [1981] の「岡倉は彼女らと秘密結社の設立

年のムラリプクル事件の被疑者の供述調書に基づくもので、1911年に編集されている。天心のインド滞在から約9年が経過し、たとえば、天心のインド滞在を1900年頃とするなど、その詳細については、不明瞭な部分も多い¹⁴⁾。実際、インドの歴史家シュミット・ショルカルは、ベンガル近代史研究を代表するその著作の中で、革命運動家と共謀する岡倉天心という風聞は、「まったく裏付けがないもの」と否定している [Sarkar 1973: 466-467]。また、アメリカ人のインド史家で、オーロピンド・ゴーシュの伝記的研究でも知られるピーター・ヒースは、ベンガルの革命運動に岡倉天心が及ぼした影響を検証すると、天心がインドから帰国した後は、その影響は「すみやかに忘れ去られた」としている [Hechs 1993: 259-267]。当時の革命運動の関係者には天心の影響に触れる証言が様々に見られるが、しかし、現実の政治運動にその痕跡が全く認められないことが、これまで疑問点として指摘されてきたのである¹⁵⁾。

本稿では、これまで取り上げられる事なかった、天心のインド滞在中の英領政府の史料の検証を通して、政府の首脳部が、確かに天心のインドでの活動の政治的な性格について検討していた経緯を明らかにする。しかし、それは、革命運動への直接的な加担ではなく、ブッダガヤ復興運動への新たな日本

人の関与に対する、当局の懸念によるものであることが示されるだろう。

本稿では、以上のような観点を踏まえて、インド滞在中の岡倉天心による、ブッダガヤ訪問の経緯について検証する。これまで紹介される事なかった、天心によるブッダガヤ訪問を伝える史料の検証を通して、当時のインドの仏教復興運動に関わろうとする天心の意図と、それが現地の人々に与えた影響の広がりや跡付けるものである。当時のインド知識人との交流を通して天心のインド体験を捉えなおしてゆく作業は、その意味では、既存の天心像を再検討し、仏教復興運動を媒介とした天心による、新たなアジア認識の形成過程を跡付けることを可能にすると言えるだろう。

本稿の構成は、以下の通りである。はじめに、これまでしばしば引用されてきた、タゴール家のシュレンドロナトの回想記を、関連史料を通して読み解くことで、天心による第二回のブッダガヤ訪問の経緯を検証する。次に、ヴィヴェーカーナンダの信徒であったノレシュチョンドロ・ゴーシュ (Naresh Chandra Ghosh) の回想記を通して、これまで日本では知られていなかった天心の第一回の訪問の経緯を検証する。さらに、ラビンドラナート・タゴールの書簡に基づくことで、新たな観点から、天心の第三回の訪問の

／ を決議したことが、イギリス植民地政府の文書に報告されている」という記事を引用することで、「イギリスの公文書に実際にインド独立運動へ参加した形跡を示すものがある」と述べている。

14) Daly 報告の6年後に編集された J. C. Nixon の報告書では、天心の革命運動への関与についての記述は、Daly 報告よりもややトーンダウンした伝聞体で記されている。具体的には、次のような記述が見られる。「ベンガルの最も初期の試みとして知られている、政治的、あるいは半政治的な目的のための結社には、法廷弁護士故 P. ミットロ、ショロラ・バラ・ゴシヤル嬢、及びオカクラという名前の日本人が関わっている。これらの活動は、カルカッタのどこかで、1900年頃に開始され、ベンガルの多くの地方に広がった、と言われている。」(An Account of the Revolutionary Organizations in Bengal other than the Dacca Anushilan Samiti, compiled by J. C. Nixon, Calcutta: Bengal Secretariat Press, 1917, West Bengal State Archivus, Kolkata, India.)

15) 具体的には、オーロピンド・ゴーシュ、シスター・ニヴェディタ、ショロラ・デビらの証言やその関連資料が知られている。その天心への言及として最もよく知られているのは、次のタゴールの言葉だろう。「幾年か前のことです。私は、日本から訪れた一人の偉大な独創的な人物に接した時、真の日本と出会いました。この人物は長い間、私達の客人となり、当時のベンガルの若い世代に測り知れない刺激を与えました。それは私達の国で、国民の意識がにわかには勃興する、まさに直前の出来事でした。」(On Oriental culture and Japan's Mission, 1929)

可能性を検証する。最後に、ブッダガヤでの土地の売却申請に関わるイギリス植民地政府の記録を対比させることで、天心がブッダガヤで試みた活動の意図と背景を検証する。

はじめに、天心のブッダガヤ訪問の経緯について、これまで明らかになっている史料から概観してみたい。

2 シュレンドロナトの回想記 —第二回ブッダガヤ訪問

インド滞在中の岡倉天心が、最も深く親交を結んだのは、ノーベル賞詩人ラビンドラナト・タゴールの甥にあたる、シュレンドロナト・タゴールであった。1902年3月にシスター・ニヴェディタを介して天心と知己を得ると、シュレンドロナトは、天心との対話に強い触発を受け、カルカッタでは天心を屋敷に住まわせ、インド周遊の旅では道中のお伴として案内役も務めた。

特に、1938年に公表されたシュレンドロナトによる英文の回想記は、天心のインドでの振る舞いを詳細に伝える記録として、貴重である [Surendranath 1938]。先述の堀至徳日記と合わせ、これまで内外の天心の伝記的研究では、主要な一次資料として参照されてきた。その既存の伝記の研究に基づき、天心のインド滞在とブッダガヤ訪問の概略をまとめると、次のようになる。

1902年1月6日にカルカッタに到着した天心は、すぐにベルル僧院のヴィヴェーカーナンダと面会し、両者はたちまち意気投合する。その後、1月27日に、ヴィヴェーカーナンダの先導で、天心は念願のブッダガヤ訪問に出発する。この第一回の訪問については、しかし、同行の堀至徳は勉学のためにカルカッタに残るので、ヴィヴェーカーナンダ

の書簡などの断片的な記録のみが知られていた。ともかく、天心は、ブッダガヤでの約1週間の滞在后、ヴィヴェーカーナンダと別れてアジャンター石窟の見学などに出かけ、3月初旬にはカルカッタに戻ってくる¹⁶⁾。

その後、日本から呼び寄せた織田得能と合流すると、再び天心は、4月19日にブッダガヤに出発する。この時には、織田得能に加え、堀至徳やシュレンドロナトも伴い、シュレンドロナトによる回想記は、主にこの第二回のブッダガヤ訪問の様子を伝えている。天心は、やはりブッダガヤに約一週間滞在するが、その後、カルカッタに戻った織田得能はすぐに帰国し、天心はヒマラヤの高原避暑地にある、ラーマクリシュナ教団の僧院に出発する¹⁷⁾。

その後、6月13日には堀至徳はタゴールの学園のシャンティニケトンに移るので、以後の天心の活動の詳細は、これまで不明となっていた。シュレンドロナトの回想でも、その後の天心との旅行記は、アーグラのタージマハルやベンガルの吟遊詩人パウルを探訪する印象的な情景を伝えているが、しかし、第二回を除けば、天心によるブッダガヤ訪問の詳細については記していない。以上のように、特に第一回と第三回の天心によるブッダガヤ訪問の経緯は、これまで史料的な制約から、その検証は限られていた。

そこで、はじめに少し長くなるが、シュレンドロナトの回想記から、第二回の天心によるブッダガヤ訪問の記事を、引用してみたい¹⁸⁾。

ブッダガヤにあるマハントの迎賓館の広い客室で彼と対座している情景が、何故どのような経緯で実現することになったかさえ、思い出せないのである。…私は彼の客だが、彼はマハントの客だったのである。

16) 具体的には、1月28日にガヤ駅に到着し2月4日にベナレスに出発するまでの7泊8日。

17) 具体的には、4月20日にガヤ駅に到着し27日にカルカッタに出発するまでの7泊8日。

18) Surendranath [1938]。この回想記は、タゴール国際大学の紀要『季刊批評』に掲載された。翻訳については、簡潔で流麗な文体に訳出されている山口静一 [1982] を採用し、適宜、インド的な名称などについて、補足的な修正を行った。

季節はちょうど夏であった。英国流と日本流を一緒にしたような朝食をとってからヴェランダの席に戻ると、灼熱の日差しはますます強まり、乾燥した外気はまるで焔に包まれたようであった。岡倉と一緒に滞在していたひとりの日本人老僧は、扇子を使うと逆に暖炉のような熱風が送られて逆効果になることに気づき、片袖を脱いだり日本製の小さな体温計を眺めたりしていた。体温計の目盛りは華氏 108 度（約 42°C、筆者注）までしか刻まれていなかった。水銀が目盛りの上限を越すと彼は絶望に打ちひしがれ毛布をかぶって「too hot, too hot!」と聞こえるような唸り声をあげた。私はインド生まれで当然太陽の神とはうまくそりが合うが、日出る国の岡倉もその点、同様であることが分かった。もっともインド北部において最高度に達したこれほどの太陽熱には彼とても遭遇したことはなかったであろう。そういうわけで私たちは一日中ヴェランダの椅子にかけ、岡倉は水キセルを啜いながら、そこに滞在することになったいきさつを私に語り始めた。

初めはブッダの参詣のみが目的だったという。ところが、心の平安が得られるどころか、寺院の荒廃と環境の悪さに彼はひどく心を傷つけられた。その上、彼は、世界中から小さなグループを作って集まった信徒たちが寺域周辺のそれぞれのお国ぶり豊かな宿泊所に泊まり、釈尊成道の故地を目の当たりに見た感激から、色とりどりの衣服を供え、儀式を行って平和と善意の共通の理想に奉仕しているのではないかという幻想を抱いていた。何事もその核心に迫らずにはおかぬ性格から、岡倉はまずマハントから土地を譲りうけ、早速にこの聖地で活動を開始する以外に方策は無いと判断したのだった。そして最初の巡礼団が派遣されるまで、差し当たって同伴の老僧にその管理を任せたいというのが彼の考えであった。必要な法的手続きが済むまで岡倉がこ

の迎賓館に滞在できるように手配したのは、私たちのある共通の友人だった。

やっとマハントとの会見がかなえられた。彼は隠棲者の姿にふさわしく僧院の屋上に作られた瓦葺きの小さな庵に住まっていたが、岡倉の贈物を恭しく受け取って、丁寧に深いお辞儀をし、偉大なる日本の著名な代表者を迎えてうれしく思うと述べた。しかし、私が通訳して岡倉の願いを詳しく説明すると、マハントは自分にはその力が無いことを告白した。英国の地方官が同じ東洋の外国人に土地を移譲することを絶対に認めないであろう、また認可を得るために政府の上層部にどう接近したらよいかも自分には全く分からないというのが、その理由であった。ブッダガヤをその聖地にふさわしく集団的参詣の場にしたいという高度に芸術的な岡倉の夢は、かくて終わりを告げたのである。

天心が初めてブッダガヤを訪れた1月の北インドは、夜は毛布だけでは寒くて眠れないほど冷え込むが、シュレンドロナトを伴って訪れた第二回訪問の4月は、すべてを焼き尽くすような強い日差しの盛夏となる。そのインドの夏を初めて体験する天心の驚きが、この回想記では印象的に描かれている。

北インドの猛暑を想像することは容易ではないが、ブッダガヤから4月28日にカルカタに戻った天心が、1週間後の5月5日には、隘路険しいヒマラヤの山中に、夏の避暑地のマヤーバティー僧院を目指していることから、暑さが堪えた天心の様子が想像される。すでに指摘したように、この記述は堀岡らのその後の伝記的研究でも繰り返し引用され、天心のブッダガヤ訪問の情景を伝えるものとして注目されてきた。

それにしても、このシュレンドロナトの回想は、とてもこの出来事の、35年以上も後に書かれたものとは思えない鮮明な記述となっており、インド知識人の記憶力には驚か

される。ただし、記憶に頼って書かれている分、やはりその出来事の詳細には、やや曖昧な部分も指摘されるだろう。

たとえば、この時の同行者は、織田得能、堀至徳、そしてベルル僧院側は、病床に伏せるヴィヴェーカーナンダに代わって、この時には弟子のスワミー・サラダーナンダ (Swami Saradananda) が同行する。そのため、ここに登場する「岡倉と一緒に滞在していたひとりの日本人老僧」は、恐らくは織田得能と思われるが、岡倉とは3つ違いの織田は、この時にはまだ42歳なので、「老僧」(An old Japanese priest) という程ではなかったと思われる。あるいは、「同伴の老僧にその管理を任せたい」という記述を見ると、すぐに帰国予定の織田得能ではなく、インドで勉強を続ける堀至徳を指すものとも思われるが、堀に至っては、この時にはまだ28歳であった。

ところで、このシュレンドロナトの回想に登場するマハントとは、出家修行者としてヒンドゥー教シヴァ派の僧院を統括する僧院長を指している。その実態は、ビハール州の代表的な大地主のザミンダールであり、ムガル時代から続く寺院領を経営する僧院領主が、イギリス植民地政府が導入した徴税機構の骨格であるザミンダラーリー制度のもとで、領地の私的所有権者として登記されたものである。すなわち、ヒンドゥー教団の僧院長が、同時に、広大な領地を管理する地主的経営者も兼ねるといって、僧院領主というべき存在であった。

イギリスの植民地支配とともに在地社会の支配階層として登場したザミンダールは、英領政府を代行し、各地の所領に地所経営の出先の機関をおき、農村部に配置された徴税事務所の書記官を監督することで、その租税

徴収から莫大な収益をあげた。規模が大きくなると、徴税請負人として中間地主を設定し、自らはカルカッタなどに広大な邸宅を構えることで、優雅な都市生活を謳歌することができた。

それに対して、ブッダガヤのマハント僧院は、ヒンドゥー教ジャンカラ・シヴァ派の10大僧院のひとつとして知られており、ビハール地方では広く民衆的な信仰を集める教団組織であった [Singh 1982]。その起源は、ムガル皇帝アクバルの統治下の1590年に、現在のマハント僧院の開祖となるヒンドゥー教バラモン修行者ガマンディ・ギリがブッダガヤに移り住んだことに始まる。シヴァ神を主宰神とする僧院は、出家修行者から構成される教団組織を持ち、マハントは僧院の宗教行事を取り仕切る管長という位置づけにあった。1902年に天心が相対したマハント・クリシュナ・ダヤル・ギリは、その第12代目の僧院長であった。

しかし、このマハントは、僧院が領有する広大な地所の所有権者も兼ねるので、英領支配下の大地主である、ザミンダールという顔も併せ持っていた¹⁹⁾。ヒンドゥー教シヴァ派の僧院長でありながら、同時に年に10万ルピーの税取という、当時のビハール州では第二位の規模を誇る地主的経営者として、地域社会でも大きな影響力を揮っていた。僧院の豊富な財力と地域の農村を管轄する地主的領主としてのマハントの権勢は、そのため近代インドの仏教復興運動の歴史では、妥協を許さない強権的なヒンドゥー保守主義者というマハントのイメージを生み出す要因ともなっていた。

とりわけ、1891年に大菩提協会を創設し、世界的な仏教復興運動をリードした仏教運動家アナガーリカ・ダルマパーラのブッダガヤ

19) ただし、マハント僧院に関しては、教団は妻帯することのない出家修行者によって運営され、マハントは、この僧院内の長老の合議によって選ばれるので、同族経営を行う地主一族のような世襲は見られない。

復興運動では、ヒンドゥー教僧院長のマハントは、大菩提協会による寺院の買い取り運動に拒否を貫き、仏教の復興運動に立ちはだかる仇敵として描かれてきた²⁰⁾。世界の仏教徒の悲願であるブッダガヤの聖地回復運動を妨害する頑迷固陋なヒンドゥー教バラモン司祭として、その宗派主義的な姿勢が非難的とされた。実際に日本でも、当時の仏教ジャーナリズムは、ヒンドゥー教司祭マハントの横暴ぶりをセンセーショナルに取り上げると、仏教徒の善意を踏みにじる、「外道マハント」として紹介する²¹⁾。

しかし、ここでシュレンドロナトが描くマハントは、意外なことに、「隠棲者の姿」にふさわしい、つつましい修行者の立ち振る舞いを見せている。植民地政府にも頭が上がらないインド人という光景は、世界の仏教徒と渡り合うヒンドゥー主義者というイメージとは、やや異なった印象を与えている。

とりわけ、土地の買い取りを願い出る天心に対してマハントが、「偉大なる日本の代表者」として歓待しつつ、自分の非力を告白し、イギリス植民地官僚が「外国人に土地を移譲することを絶対に認めないであろう」と、述べている場面は印象的である。冒頭で取り上げた、イギリス人の役人に頭の上から上がらないマハントという清見の見解は、このシュレンドロナトの記述に対応するものと言えるだろう。

ここから清見は、政府から睨まれることを嫌ったマハントが、地方役人の話にかこつけて、体よくその申し出を断ったとする河口の見立てを紹介するのだが、このシュレンドロナトの記述でも、天心の申し出はあっけなく却下されたという場面で、その回想は終わっている。「ブッダガヤを聖地にふさわしい集

团的参詣の場にしたいという高度に芸術的な岡倉の夢は、かくて終わりを告げた」となるのである。

以上のシュレンドロナトの回想は、ブッダガヤでの天心の様子を伝える主要な記録として、これまでも様々に紹介されてきた。すでに見たように、近年の天心の伝記的研究でも、この記述を越えるものは見られず、土地取得の交渉は最終的には不首尾に終わったので、その後の経緯を伝える記録も限られていたと言えるだろう。

100年以上前のブッダガヤでの出来事の真相に迫ることは、そのため、インド側での新たな史料の発掘が不可欠となっていた。そこで次に、ラーマクリシュナ教団の史料を取り上げてみたい。

3 ノレシュチョンドロ・ゴーシュの回想記 —第一回ブッダガヤ訪問

(1) カーゾン総督の照会状

次に取り上げるのは、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの信徒のひとりである、ノレシュチョンドロ・ゴーシュの回想記である²²⁾。ノレシュチョンドロは、晩年のヴィヴェーカーナンダに顧従し、その言動を詳細に伝える記録をベンガル語の回想記として残している。ノレシュチョンドロは、後にラーマクリシュナ教団の修行僧となる、ヴィヴェーカーナンダの忠実な信徒のひとりであった。その中でも、特に天心を同道したブッダガヤ訪問の記録は、天心による第一回ブッダガヤ訪問の詳細を伝えるものとして、貴重である。これまで英語圏でも日本語圏でも、天心との関わりでこの記事が紹介されることは無く、ベンガル語の読者が、その記録の歴

20) 1891年に始まるブッダガヤをめぐるダルマパーラとマハントとの対立の詳細については、拙稿を参照されたい [外川 2016]。

21) 「印度の仏教徒迫害事件について痛言す一大いに英国政府の反省を促し、切に吾国仏教徒に檄す」『佛教』第115-117号、1896年6月号

22) Ghosh [2012] より。初版は、1989年であるが、ここでは最新の改訂版を用いた。その他、ラーマクリシュナ教団に関連する資料は、英語文献については Advaita Ashrama が、ベンガル語文献については Udbodhan Ashram が、様々な編集作業を進めている。

史的な意義に着目することも、限られていたと言えるだろう。

以下は、1月28日にガヤ駅に到着した一行の様子を伝えるノレシュチョンドロの回想記の一節を翻訳したものである。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダの一行に同行し、私もブッダガヤを訪れました。それがどれほど大きな喜びであったのかを、ここで描くことはできません。日本から来た岡倉を連れて、ブッダガヤを見学するために、スワミーは出かけたのです。マクラウドも一緒に、カナイ・マハラジ（スワミー・ニルバヤーナンダ、ヴィヴェーカーナンダの弟子、以下、括弧は筆者注）が、幹事役でした。そのお手伝いが、ネダ（ナドゥー、スワミー・ニランジャンナーナンダ）と私（ノレシュチョンドロ）でした。当時は、ハオラ駅からガヤ駅に向かうためには、バンキプル駅で乗り換える必要がありました。私たちは、朝早くバンキプル駅に到着しました。すぐにガヤ駅に向かう列車に乗り換えると、2～3時間で到着しました。

岡倉は、当時のインド総督カーズンの照会状を携えており、あらかじめ電報でそのことは伝えられていました。ガヤ駅では、地方政府の担当部署の役人が出迎えに来ていました。彼らは、興味津々の様子で、一行を丁寧に扱って、宿舎のバンガロウに案内しました。警護の係りも配置されました。2日間、全員がこのバンガロウで過ごしました。マクラウドと岡倉のための料

理人の手配と、スワミーの好物の食べ物の準備は、カナイ・マハラジが手配しました。彼らの健康状態を見て、食事の準備がされました。菜食のスープが準備されたことは、よく覚えています。スワミーは、すべての食事について、よく吟味しました。その頃には病状が進行しており、スワミーの食事の量は、とても少なくなっていたのです。

この回想記で興味深いのは、天心が、時の英領インド総督カーズンの照会状を携えていた、というくだりである。英領インドでは、賓客に対する駅頭での出迎えや、巡視官が滞在する政府のバンガロウでの接遇は、地方の植民地官僚の日常業務であったが、この時の天心一行が、日本から訪れた準公人としての扱いを受けていたことは興味深い²³⁾。同行のヴィヴェーカーナンダが、すでにインドの間では国民的な著名人であったことを割引いても、ここから少なくとも天心が、事前にカルカッタの総督府でブッダガヤ訪問のための便宜供与を依頼し、それに対して政府が照会状を下付していた、という経緯を推測させるからである。

文部省の古社寺保存会の視察予算からインドへの渡航費用をねん出していた天心は、正式な外交ルートにその渡印の記録は見られないが、カーズン総督の照会状を携えていたというエピソードは、少なくとも英領インド政府が天心のことを、日本政府の関係者と見なし、接遇していた可能性を示している²⁴⁾。

極東でのロシアの南下に備える当時の日本

23) この時期の日本政府の外交文書や英領政府の公文書には、同年に英領インドを公式訪問した奥男爵のような記録は見られないので、ここでは準公人とした。

24) この点について、同行したヴィヴェーカーナンダも弟子に対して、天心がインドに来た理由を、自分を日本に招聘するために、「日本政府から派遣されてきた」と述べているので、インド側の人々も同様の認識を持っていたことが分かる [Datta 1953: 75]。また、渡航の費用に関しては、岡倉一雄 [1971: 167] は、「古社寺保存会から、遺跡保存調査の名目で、数百千金を支出してもらっていたらいい」と述べている。なお、インド滞在中の天心は、自らは考古学者を名乗っていた。これは、学術目的で当時のインドの史跡を訪れる外国人の多くが、考古学者を名乗ることを踏まえたものと考えられる。

政府は、同様にヨーロッパや中央アジアでのロシアの覇権の拡大を懸念するイギリス政府の思惑と一致することで、日英同盟の締結交渉を進めていた。その日英同盟が調印・発効されるのは1902年1月30日であるが、ちょうどこの時に天心は、英領政府の地方役人による接遇を受けていたことになる²⁵⁾。アジアの新興国・日本と大英帝国による同盟締結のニュースは、当時のインドでも大きく報道され、同年10月の英領インド皇帝の戴冠式には、日本政府は陸軍中将奥男爵を公賓として派遣するなど、日英間の政治的な接近は、英領インドにも様々な影響を及ぼした²⁶⁾。

特に、日英同盟の締結交渉では、極秘裏に日本政府は、極東でのロシアとの開戦の方針を伝えていたが、同様にイギリスは、中央アジアでのロシア南下の脅威を抱えていた。そのため英領インドの位置づけは両国の課題となり、有事には日本陸軍を英領インド軍の補完部隊として派遣することも検討された²⁷⁾。特に、ロシアのチベットへの介入に強い懸念を抱くカーゾン総督は、1903年1月にはチ

ベットへの使節団の派遣を本国政府に要請し、それは最終的に、1904年8月の英国軍によるラサへの軍事侵攻をもたらした²⁸⁾。当初は、海上輸送などの問題から検討課題となっていたインドへの日本陸軍の派遣も、その戦略的な重要性から1905年8月の日英同盟の第一次改定で条項に盛り込まれ、インド北西辺境地域の防衛のために日本軍を派遣する可能性が、本国から英領インド政府に照会された²⁹⁾。

天心がインドに滞在した1902年は、日英同盟における英領インドの位置づけをめぐる、このような水面下での様々な交渉が行われていた時期に当たる。そのため、この時の日英間の急速な政治的接近は、ブッダガヤでの天心一行が賓客としての接遇を受けた、ひとつの背景を与えるものと言えるだろう。少なくとも、イギリス人官僚が英領インドを訪れる日本人に「興味津々の様子」であった理由は、異国からの来訪者への、単なる好奇心以上のものであったことは間違いないだろう。

-
- 25) 県当局が管理するバンガロウへの滞在は、原則として県長官の許可が必要であり、それは天心に対する一定の身元保証がなされていたことを意味するだろう。この二日後の2月1日には、ベンガル副知事ジョン・ウッドバーンがガヤ駅に到着し、盛大な歓迎を受けている (*The Behar Times*, Friday 7th, 1902)。この時には、ガヤ県長官 C. A. オルダムの先導のもとに、多数の役人や地元の名士、群衆が出迎え、盛大に歓待した様子が伝えられている。天心は、この時には、マハント僧院の客人として、ブッダガヤに滞在中であった。その後、県長官オルダムは、ダルマパーラとマハントとの間で長年の争点となっていた新たなレストハウスが、ようやく3月に基礎工事を始めたことを報告している [外川 2016]。
- 26) 「印度皇帝戴冠祝賀式参列者諸費ヲ第二予備金ヨリ支出ス」第六類・公文類聚・第26編、明治35年・第11巻、「陸軍中将男爵奥保馨以下4名英領印度へ被差遣ノ件」、第五類・任免裁可書、明治35年・任免巻27 (東京、国立公文書館)。一行は、11月16日にコロンボに到着、カルカッタには12月2日到着する (Eur F111/182, Curzon Collection, British Library)。なお、奥は後の元帥・陸軍参謀総長であり、インドでは、英領インド軍の軍事演習も参観した。
- 27) 1905年8月の第一次同盟改定によって、その適用範囲が英領インドまで拡大され、インドへの日本陸軍の派遣を含むものとなる経緯については、黒野 [2003] が詳しい。この時に両国は、イギリスのインドにおける権益と、日本の朝鮮半島に対する権益の相互承認も行った。
- 28) カーゾンの対チベット政策については、グルンフェルド [1994: 63-95] を参照した。ヤングハズバンド大佐の指揮によるラサへの軍事侵攻の背景については、Lamb [1959] が詳しい。日英同盟の締結がロシアの南下政策に与える影響への懸念については、以下も参照されたい。From *The Earl of Northbrook to Lord Curzon*, No. 66, February 19th, 1902, *The Paper of Lord Curzon (1859-1925)*, Part-1, Demi-official correspondence, Reel 26, Mss Eur F111/204-206, Jul 1901-Dec 1902, British Library.
- 29) 黒野 [2003]。インド政府との関係については、M/3593/1906, IOR/L/Mil/7/17076; No. 48 of 1907, IOR/L/Mil/5/711, 1905-1907, British Library.

(2) 僧院長マハントの歓待

続けて、ノレシュチョンドロの回想記を見てゆきたい。

スワーミーは、ヴィシュヌ・パダ・パドマ寺院の参拝に出かけました。そして、朝食を終えると、一同は馬車に乗って、ブッダガヤ参拝に出かけました。私たちは、10時か11時頃に到着しました。寺院の正門は、マハントの屋敷の目の前でした。私たちの馬車は、その屋敷の前に止まりました。当時のブッダガヤの僧院長は、まだ若く、28歳から30歳くらいでした。名前は、クリシュナ・ダヤル・ギリと言い、ネパール人でした。彼は、スワーミーを歓迎するために、弟子たちを引き連れて、待ち受けていました。事前に、連絡がされていたのです。スワーミーも、年齢的には若かったです。その時の、マハントの美しい姿が思い出されます。真っ白な装束の修行者の出で立ちでした。ヒンドゥー教の聖地で、遊行者たちがしている恰好と同じものでした。足には、修行者の木の下駄を履き、合掌した姿勢で立っていました。うやうやしく、とても甘美なお姿でした。

スワーミーが馬車から降りると、すぐに深々とその足元に敬意を表して挨拶し、一同を案内すると、屋敷に入りました。最初が、スワーミー、それにマクラウドと岡倉が続き、最後に残りの従者たち。壇の上にあがると、自分の敷布のそばに、一同を招きました。優れた人物こそ、優れた人物の歓待の仕方を知っていると思いました。マハントは、スワーミーを、自分の敷布に座らせました。マクラウドと岡倉は、敷布の上のスワーミーの隣に座りました。マハントは、何も言わずに合掌すると、壇の下のスワーミーの御足のそばに座りました。スワーミーはその時、パンジャビ服を身に付けていました。オレンジ色の修行者の服装で、靴下に靴、耳まで覆う帽子をかぶって

いました。そして、マハントは何度も繰り返して言いました。「御礼を申し上げます。何という光栄でしょう。」

スワーミーの滞在の手配が、たちまちのうちになされました。別棟の建物でした。マハントは弟子たちに、スワーミーが必要とするものは、いつでもすぐに手配するよう指示しました。そのため、ブッダガヤ僧院では、足りない物は何もありませんでした。この大きな屋敷の警護のために、政府に雇用された2名の警備人もいました。屋敷には、40から50の部屋があり、2階には大きな広間もありました。この広間で、スワーミーは過ごされました。屋敷の中に、マクラウドのために別な部屋が準備され、岡倉にも、また別な部屋が用意されました。

10-15分のうちに、大きなお皿に盛られた軽食が用意されました。米、豆、塩、ギー油、スパイスなどです。私たちは、ひとりのバラモンの料理人を連れていました。マクラウドは、料理したものはすべて食べました。毎日、大きなお皿に、蜜柑などの様々な種類の果物、ピーナッツやピスタチオなどが準備されたのです。

ここには、ヒンドゥー教シヴァ派の僧院長マハントによる、丁寧なもてなしの様子が描かれている。マハントの屋敷で主賓としてもてなしを受けるのはヴィヴェーカーナンダであり、同行の天心とマクラウドは、その同伴者に位置づけられている。

「御礼を申し上げます。何という光栄でしょう。」というマハントの言葉は、シカゴ宗教学会議で一世を風靡し、その凱旋帰国でインドの人々の熱狂的な歓迎を受けたヴィヴェーカーナンダの様子がかがわれる。大都市カルカッタからはるばる訪れたヴェヴェーカーナンダを、自らの屋敷でもてなすことになったマハントの、高揚した様子は印象的である。

すでに述べたように、僧院領主としてのマハントは、ビハールでも第二位の規模を持つ

大地主であり、僧院を兼ねたその広大な邸宅は、地主の屋敷というよりも、地方領主の城郭というべき威容を備えている。地元の領民に対しては絶大な権勢を揮うマハントが、しかし、上座の敷布にヴィヴェーカーナンダを座らせ、自らは敷布の外からうやうやしく合掌して礼を尽くしている。

すでに見たように、ブッダガヤのマハントは、1891年以來、ダルマパーラの聖地復興運動と対立し、頑迷固陋なヒンドゥー教バラモン司祭として描かれてきた。しかし、このノレシュチョンドロの回想記では、物腰の洗練された謙虚な若者として登場し、ラーマクリシュナ教団の盟主ヴィヴェーカーナンダを前にして、敬虔な宗教者として描かれているのは興味深い。そのマハントの姿を、次に見てゆきたい。

4 マハントの僧院にて

(1) マハントとの対話

ヒンドゥー教のシヴァ派は、樹木信仰や聖石信仰などのインドの土着信仰を基盤とし、ヒンドゥー教の三大神としてのシヴァ神信仰に依拠することで、インド全域で広く民衆的な支持を集める宗派の一つである。そのシヴァ派に属し、ムガル時代からビハール地方で民衆的な信仰を集める僧院長が、アメリカ帰りで、近代ヒンドゥー教の改革運動の旗手であるヴィヴェーカーナンダと対面する様子は、近代の宗教改革運動の息吹がみなぎる当時のヒンドゥー社会の一場面を伝えるものとして興味深い。そのヴィヴェーカーナンダのマハントとの対話を、ノレシュチョンドロは、次の様に記している。

マハントは、毎朝、またある時には午後から2時間ほど、スワーミーと様々な事柄について、宗教談議をしました。会話は、ヒンディー語で行われ、その中で、しばしばサンスクリット語の聖句が唱えられまし

た。スワーミーは、マハントとじっくりと話し込むと、その後でこう言いました。

「大変な学識者だ。とても敬虔で、宗教的で、正直で、優れた人格者だ。このような人物は得難いものだ。真の修行者と見た。」

こうして二人は、互いの宗教談議を心から歎んだのです。二人の会話に割り込んで、その歎びを共有するだけの力は、私にはありませんでした。ただ私は、外からその様子を眺めていました。マハントはいつも、とても敬虔な様子で、スワーミーの御足のそばに座りました。スワーミーへのお世話に、何ひとつ粗相がないように、常に心を配っていました。

このブッダガヤでのマハントの質素な暮らしぶりを、スワーミーはとても賞賛しました。褒めちぎるという様子でした。この僧院では、毎日、午後になると、100頭から150頭の雄牛が、薪をのせて運んで来る様子が見られました。そして、修行者たちによる、夕方のお供えと料理の準備が行われました。大変な、大地主でした。

「見てごらん下さい。なんと膨大な資産でしょう。それなのに、あの方は、それにはまったく関心を示さないのです。財産のとりこにはならないです。」

この時には、およそ50人から60人の遊行者が、毎日、マハントの屋敷に滞在していました。マハントは、そのひとり一人に、食事が済んだのか、ちゃんと供物が届いたのかと、声を掛けました。それから、自分の食事を始めるのです。供物のご飯を炊いただけの、菜食料理を食べていました。

この記事では、今度はヴィヴェーカーナンダがマハントの学識に触れて、感銘している様子が描かれている。ヴィヴェーカーナンダは、マハント・クリシュナ・ダヤル・ギリとの宗教談議に花を咲かせると、「大変な学識者だ」と称賛する。世界の仏教徒の仇敵とし

て描かれてきた既存のイメージとは異なり、ここでマハントは、ひとりの敬虔な修行者としてヴィヴェーカーナンダによって語られている。

シヴァ神のご神体とされるリング（聖石）への信仰は、もともとは自然石や樹木などへの土着的な自然信仰から発達するものと考えられ、実際にインドの各地で、リングの祭壇を見ることができる。多様な民族集団や地域言語を抱えるインドでは、自然信仰に由来するシヴァ神信仰は、そのため最も幅広い支持を集める宗派のひとつとされる。ブッダガヤのマハント僧院は、その土着的な民衆信仰に根差し、地域の多様なヒンドゥー農民の信仰を集める、シヴァ派の僧院教団となっていた。

それに対して、ヴィヴェーカーナンダは、キリスト教にも比肩するすぐれた世界宗教としてのヒンドゥー教を唱導し、1893年のシカゴ宗教学会議で一世を風靡する。インド古代の叡智であるヴェーダーンタ思想をヒンドゥー教の根幹に据え、ちょうどキリスト教が西洋文明の精神的基盤を与えるように、ヴェーダーンタの優れた思想性が、西洋文明にも匹敵する、インド文明のすぐれた特質を体現するものと論じた。

そのヴィヴェーカーナンダが唱導するヒンドゥー教は、当時の民衆的なヒンドゥー教に温存される儀礼主義や迷信を払拭し、古来のヴェーダ聖典の叡智を根幹とした、優れた思想性を備える世界宗教として構想されるものであった。そのヴィヴェーカーナンダとの議論を重ねることで、マハントがその思想に触発を受けてゆく様子は、ヴィヴェーカーナン

ダが、コロンボからアルモラーへと、インド各地での凱旋講演を続けた時にも同様に見られた光景と言えるだろう。そのマハントに対してヴィヴェーカーナンダもまた、修行者としての学識や人格への賞賛を、惜むことなく披瀝するのである。

祭礼や日常的な宗教生活を通して農民の土着的心性に根差した地方教団を統括する僧院長マハントと、英領インドの首都カルカッタでラーマクリシュナ教団を立ち上げ、世界宗教としてのヒンドゥー教の優越性を広く世界に向けて唱導するヴィヴェーカーナンダとの対話が、このように互いに意気投合して進められてゆく様子は、近代インドのヒンドゥー教改革運動における、ひとつの幸運な出会いを物語るものと言えるだろう³⁰⁾。

(2) マハント僧院の生活

マハントの僧院における、その後の回想記の記述を見てゆきたい。

ある日、ビルマ人仏教徒の男女の一団が訪れました。私たちが滞在している屋敷に泊まることができるかどうか、マハントに尋ねました。私たちに割り当てられていた部屋は、いつもは巡礼者の宿泊所として使われていたようです。マハントは、大変に礼儀正しく対応しました。マハントは、すぐに言ったのです。

「私は、スワミーに、屋敷のすべてを明け渡しました。スワミーの許しが得られれば、あなたたちは、すぐに泊まることができます。この屋敷は、今はスワミーの

30) たとえば、ラムモホン・ラエ（ラーム・モーハン・ローイ、Ram Mohan Roy, 1774-1833）のブランモ・ショマジ運動（ブラフマ・サマージ）が、近代インドを代表する宗教改革運動としての先駆的な意義が評価されながら、啓蒙主義的なエリートによる改革運動という意味では、インドの幅広い民衆には根付くことなく、やがて歴史の表舞台から消えてゆく経緯と、それは対比して見ることができるだろう。ここでは詳述できないが、ヴィヴェーカーナンダとマハントとの交流が示しているのは、近代ヒンドゥー教の改革運動を代表するラーマクリシュナ教団が体現する、当時のインド社会での民衆的な広がりと言えるだろう。その近代ヒンドゥー教改革運動におけるヴィヴェーカーナンダの位置づけについて、ここで論じる余裕はないが、植民地近代におけるヒンドゥー教改革運動の背景については、拙稿も参照されたい〔外川 2010〕。

ものなのです。」

スワーミーは、その時にすぐに、泊めることに同意しました。

この時には、政府のバンガロウにも、ひとりのベンガル人が何日か泊まっていました。スワーミーに会うために、このベンガル人は、毎日、やって来ました。彼もスワーミーを、とても尊敬している様子でした。毎日、ひとつの素焼きの壺にパルミラヤシの樹液、もうひとつの壺にはナツメヤシの樹液を運んできました。スワーミーは、岡倉にパルミラヤシの樹液を飲ませました。私たちはみな、ナツメヤシの樹液を飲みました。そして岡倉は、よく酔っ払っていました。スワーミーは、その岡倉の相手をしながら、「これが、私たちの国の地酒なのです」と言う、からかったり、冗談を言ったりしたものです。

スワーミーはいつも、何か新しい発想がひらめいていました。「こんなにヤシの樹液があるなら、無駄にしないよう、今日はこの樹液を使ってご飯を炊こう。」と言うのです。こうして実際に料理をし、食べて見ました。

私たち5人にご馳走しようと、毎日、市場で食材を手に入れて、色々な料理を作りました。スワーミーは、とても料理が上手でした。料理の手順を詳しく知っているのです。

インドの農村部で採取されるヤシの樹液は、料理やお菓子の材料など、様々な用途に用いられる。ヤシの木の幹に素焼きの壺を括り付け、木肌に傷を入れると、その溝にそって樹液がにじみ出て、樹液が壺に溜まる。集められた樹液は、一日おくとビールのように軽く泡立って発酵し、独特の臭みのあるお酒となる。中でもナツメヤシの樹液は、その実は糖分が高くお菓子（デザート）としても好まれるように、樹液も甘みが強く飲みやすい。そのままジュースとしても、好んで飲まれている。

それに対してパルミラヤシの樹液は、やはり発酵させるとターリーと呼ばれる地酒となる。タール・ガーチ（パルミラヤシ）の樹から作られるターリーは、最も簡素な地酒として、インドの農村部では、特に農業労働者などが好んで飲む安酒として知られている。英語ではトーディー (toddy) と呼ばれ、アフリカから東南アジアまで広く分布する、ポピュラーなヤシ酒として知られている。ヴィヴェーカーナンダが、もっぱら天心に勧めていたのは、このパルミラヤシのお酒の方であった。

こうして天心の一行は、菜食で禁欲修行を行うマハント僧院の一角に滞在中ではあったが、地元の農家で作られるヤシ酒を手に入ると、酒宴も楽しんでた。ヴィヴェーカーナンダもまた、それをとがめだてすることなく、貧しい農民が好む素朴な地酒を痛飲する天心に、冗談を言ってからかいながら、楽しんでた様子が見えがえる。

(3) 日本の仏像

こうして、様々なエピソードを通して、ブッダガヤでの滞在を楽しんでいた天心一行であったが、その当初の目的である、ブッダガヤ寺院の参詣を怠っていた訳では無い。以下の記述は、一行のブッダガヤ寺院とその近傍への参詣の様子を描いているが、それは同時に、当時の寺院境内の状況を伝えるものとしても、興味深い。

7-8日、ブッダガヤに滞在しました。スワーミーは、毎日、ブッダガヤ寺院に参詣しました。境内のそれぞれの石仏の表情や彫像の技巧について、私たちに解説してくれました。境内の北西の角にある建物には、日本の仏像が安置されていました。その姿は、まさにスワーミーが座っているお姿にそっくりでした。

ある日、私たちは、数マイル離れた、ブッダの修行の洞窟を見学に出かけました。ス

ワーミーは駕籠で、マクラウド、岡倉、そして私はゾウに乗って。ナドゥとカナイは、確か馬に乗って。3種類の乗り物がありました。警護の人も雇われました。お茶などの準備にも抜かりはありません。清涼水や果物、お菓子なども食べました。スワーミーは、少し休んでから、山の上の洞窟を見に行きました。いくつかの洞窟があり、とても美しかった。洞窟の内部の壁面も美しく、すべて仏像が安置されていました。古代の修行者たちは、ここで瞑想修行をしたのでしょう。すべて見終わり、夕方までに戻ってきました。

大菩提協会を率いるダルマパーラのブッダガヤ復興運動や、その後のマハントとの訴訟問題は、ダルマパーラへの毀誉褒貶とも合わせて、当時の日本の仏教界では良く知られていた。たとえば、織田得能は、1893年の第二回のダルマパーラの来日に際して開かれた、ブッダガヤ復興のための基金を募る、本郷・真浄寺の会合にも参加している³¹⁾。天心に同行した織田得能がすでにダルマパーラと知己があり、その運動や様々な評価も熟知していたので、天心もまたその織田を通して、ダルマパーラのブッダガヤでの活動については、十分な理解を得ていたものと思われる³²⁾。しかも、この時の天心は、ベルル僧院での仏教談義でヴィヴェーカーナンダと意気投合すると、ヴィヴェーカーナンダを招待した京都での東洋宗教会議を開くことを計画していたのである³³⁾。

その天心が、ブッダガヤでの滞在中に、ダルマパーラの活動が当初の目論見とは異なり、遅々として進んでいない状況を目の当たりにすることで、何らかの手を打とうと考えたことは容易に想像される。少なくとも、「その北西の角にある建物に、日本から来た仏像が安置されていた」という記述は、マハントとの間で大きな騒動となった日本の仏像が、この時の天心一行の目にも留まっていたことを示している。実際に、次節で検証するように、この時に天心は、ブッダガヤ寺院の状況を見ることで、日本人巡礼者のためのレストハウス建設を計画したものと考えられるのである。

そこで次に、レストハウス建設のための地所の取得をめぐる、天心の第三回のブッダガヤ訪問の様子を検証してみたい。

5 タゴールの書簡—第三回ブッダガヤ訪問

冒頭でも述べたように、インド亜大陸を幅広く渉猟し、史跡巡りやインド知識人との交流、東洋宗教会議の計画などで多忙を極めた天心が、そのインド滞在中に、ひとつの場所を3度も訪れたと考えられるのはブッダガヤだけである。そのブッダガヤ訪問の経緯は、これまでも堀至徳日記やシュレンドロナトの回想によって部分的には知られていたが、しかし、3度目となるブッダガヤ訪問について、これまでその詳細を伝える史料は知られていなかった。

そこで、次に検討するのは、詩人ラビンド

31) 『浄土教報』第164号、1893年12月5日、「南北仏教に関する対話会」より。この時には、織田得能の他、村上専精、小栗柄香頂、釋興然らが参加した。

32) この点について、帰国後に織田得能は、次のように述べている。「数年前ダンマバラ氏の日本に遊ぶや、帰るに臨みて芝天徳寺住職朝日秀宏師に説き、佛陀伽耶塔の第二層に安置せんと約にて、坐像の阿弥陀佛一尊を請じ来たり…遂に裁判沙汰となれり…其始末を詳に記して一大冊子として印刷せしものあり、之を読まばダンマ氏が法庭に於ける口供によって其人となりを見ざるを得ん、只勿体なきは阿弥陀佛の尊像なり、此佛像が火花を散らせし争いの種となりたるのみならず、今は之を安置し申す処もなければ、已むなく緬甸国の建てし一休息所の片隅に据え奉り…」『中外日報』第877号、1902年7月13日

33) 天心が、京都で計画された東洋宗教会議にヴィヴェーカーナンダを招待しようとする経緯については、拙稿を参照されたい〔外川2014b〕。

ラナート・タゴールの書簡に見られる、天心への言及である。1913年に非ヨーロッパ人として初めてノーベル賞を受賞したタゴールについてここでは詳述しないが、天心がインドを訪れた1902年は、ちょうど前年の12月に民族教育を目指して創設した、シャンティニケトンの学園の揺籃期に当たっている。ニヴェディタの紹介で天心と知己を得たタゴールは、すぐにそのシャンティニケトンに天心を招待するなど、両者は親交を深めていた³⁴⁾。

以下の記事は、天心のブッダガヤ訪問の予定を聞いたタゴールが、天心と共通の知り合いである、シュリシュチョンドロ・モジウムダルに宛てた書簡の一節である³⁵⁾。この時にシュリシュチョンドロは、現在のジャールカンド州の土地登記事務所の行政官として勤務しており、このタゴールの手紙は、地方役人としてのシュリシュチョンドロに、天心のために力を貸すよう促している。

その後、岡倉とシュレンは、ガヤに出かけた。君が遠くにいと聞いて、彼らは君の住所を尋ねることができないでいる。マハントは相変わらずの状態だ。マハントは、政府の許可なくして、あの土地は提供できないと言っている。君からマハントには、何か特別の通達を出すことはできないだろうか。手ぶらのままで日本に帰るようなことになれば、ひどく面目を失うだろうと、岡倉は言っている。そんな穏やかな言い方ではなく、君からマハントには、少し強く言ったらどうだろうか。

岡倉には、君からガヤの煙草を送るといふ約束だったが、そのことは忘れてしまったようだね。彼は、9月20日には日本に帰るので、その前には岡倉に、上物の煙草

をひと束、送るように。…

入学資格試験に通ったら、私はロティンドロ（タゴールの長男）を、鉱山学か何か、実用的な分野を学ぶために、日本に送ろうと思っている。日本で学んだことはすべて、シャンティニケトンの学園に戻れば教えることができるだろう、というのが私の考えだ。…ベンガル人の雇用状況などが悪化しているのは君も知っているだろう。未来は暗澹としている。それでも、何かひとつ手に職を付けて、技術や知識を学ばせないと仕方がないのだ。ヨーロッパには留学をさせないように。お金も恐ろしく掛るだろう。日本が、私たちの唯一の希望なのだ。

この9月7日付のタゴールの書簡は、なお断片的なものではあるが、4月のマハントとの交渉の後、土地の売却を断られた天心が、それでもあきらめ切れずブッダガヤに、3度目の訪問をする経緯を伝えている。言を左右にするマハントに対し、タゴールは自ら筆を執ると、ビハールの地方役人の友人に、天心のために何か便宜を図ってやれないかと、相談を持ちかけている。

ここから明らかに、タゴールもまた天心から、ブッダガヤでの日本人レストハウスの建設計画を聞かされていたことが分かる。それは天心にとっては、インド訪問の成果として、日本に持ち帰る手土産ともされていた。タゴールの書簡は、そのブッダガヤへの天心の意気込みを伝えている。

この時の天心については、ニヴェディタの書簡から、これまでマヤーバティーから戻った天心が、8月2日にシュレンドロナトを伴って、北インドへのひと月の旅行に出かけた時期とされた³⁶⁾。アジャンター・エローラを目

34) 天心のシャンティニケトンへの訪問の経緯については、拙稿を参照されたい [外川 2014a]。

35) Letter of Rabindranath Tagore to Shrishcandra Majumdar, Jharkhand, Palamu Jela, Land Accountant Officer, September 7, 1902, *Biswa-Bharati Patrika*, Shraban-Ashwin, 1966

36) Sister Nivedita to Miss J. MacLeod, July 28, 1902, in Letter of Sister Nivedita, Vol. I, Sankari Prasad Basu (ed.), 1982, Calcutta: Nababharat Publishers, pp. 487-489. 天心は、9月4日にカルカッタに戻ってくる。

指した1月の中部インドへの踏査行に続き、二度目となる8月の踏査行は、アングラーのタージマハルや、アムリットサル黄金寺院など、北インドの名所旧跡を訪れるものとなっていた。

これを、天心に同道したシュレンドロナトの回想記で見ると、ナーランダーからボンベイ（ムンバイ）、ラーホールを経て、アングラーを訪れたことが記録されている。すでに見たように、これまでシュレンドロナトの回想記では、ブッダガヤでのマハントとの会見は、イギリス役人の断りによって「終わりを告げた」とされるので、ナーランダーから始まる北インドへの探訪は、それとは切り離された別の出来事として理解されてきた。しかし、ここで取り上げたタゴールの書簡を見ると、この時に天心は、まずはブッダガヤを訪れて、改めてマハントと交渉をし、それからナーランダーに向かったことが推測されるだろう。

ナーランダーは、ブッダガヤから50 km（約30マイル）ほどの距離にあり、交通手段の未発達な当時の旅行者は、ナーランダー僧院跡やラージギルなどの仏跡関連の遺跡を訪れるのに、鉄道の幹線駅でもあるガヤを拠点とし、ここから各地に移動した³⁷⁾。すなわち、「岡倉とシュレンは、ガヤに出かけた」というタゴールの書簡は、8月2日にカルカッタを出発した天心とシュレンドロナトが、ガヤを経由してナーランダーに向かい、その後のひと月に渡る北インドの踏査行に出かけたことを伝えている。

ところで、この時のインド踏査行は、天心の案内役として同道したシュレンドロナトにとってまた、思い出深い出来事になったようである。僧院でのマハントとの会見の様子が、4月の酷暑の難行苦行ぶりと合わせて描かれるのとは対照的に、ナーランダー訪問では、象の背中に揺られてインド辺境を渉猟す

る漫遊行として描かれている。そのシュレンドロナトの回想記の後半の一節を、引用してみたい。

ナーランダーの遺跡に行く道順を教わり、地元の地主から小象を借り受け、その首から尾にかけた縄に捕まって、斜めになった裸の背中にしがみついた。こうして30マイルほど、丘を越え、谷を渡って、田舎を旅した。雨の日は濡れ、晴れた日は太陽に焼かれて口をあいて見ているビハールの若者に会うたびに、私はカルカッタのヒンディー語できいてみたが、無駄だった。大学の廃墟らしい所にたどりついたことは一度もなかった。何も知らない岡倉は、教育のあるヒンドゥー教徒の息子のヒンディー語がはっきり通じないのだとはつゆ知らず、サドダーナ王がこんな人民を支配しなければならなかったのなら、シッダルタ王子が世を嫌ったのも無理はない、との感想を漏らしていた。

ナーランダー大学遺跡を探す強行軍のために岡倉は熱を出したようなので、私は鉄道で行ける所にある最寄りの友人のもとで、しばらく休息しようと急いだ。岡倉を紹介された友人の顔を見た時、私は吹き出しそうになるのをやっとなげく。岡倉は、旅行用にと、彼自身の創案で、中国の更紗を使ってカルカッタの仕立屋に作らせた、道教僧の着る頭巾つきの僧衣をつけていた。そのいでたちの効果も、この環境の中では、風変わりどころのものではなかった。とにかく私の友人は客に病人食をしきりとすすめたが、我が病人は、回復食としてのミルクや肉汁、ぶどう酒を信用しなかった。日本ではおかゆが発熱のあとを元気づける食べ物になっていると言って、熱湯の中にご飯をまぜ、それを茶碗一杯食べると元気を回復し、また旅行を続けることが出来た。

37) たとえば、1902年12月から翌1月にかけてナーランダーやラージギルを訪れた大谷光瑞もまた、ガヤ市を起点として、周辺の仏跡探査に出かけている [上原 1937]。

ここで描かれた天心は、インドでの生活にもすっかり馴染み、波乱万丈のインド旅行を楽しんでいるように見える。そのナーランダーへの漫遊行は、「雨の日は濡れ、晴れた日は太陽に焼かれ」とされるが、乾季の北インドの酷暑期にあたる4月は、突発的な嵐を除けばほとんど雨は降らない。時に雨が降り、また強い日差しが照りつけるというのは、雨季のモンスーンが始まる7月以降の北インドの、典型的な気候である。このことから、この記述が、防寒のために「耳まで覆う帽子」を必要とする1月ではなく、「too hot, too hot!」と唸り声をあげる酷暑の4月でもない、湿度が高くインド人でも体調を崩しがちな、雨季の最中の8月の情景を描いていることが分かるだろう。

言い換えると、シュレンドロナトの記事は、必ずしも時系列に沿った記述ではなく、フラッシュバックのようによみがえる、天心との印象的な情景を綴りあわせて回想したものと考えられる。特に、マハント僧院を訪れた4月と8月の2度の体験が、ここでは区別されずにひと続きの出来事のように描かれていることを、それは推測させるものと言えらるだろう。

そこで、第三回のブッダガヤ訪問の情景を、改めて清見の考察に照らして検証してみたい。

6 イギリス植民地政府との交渉

(1) 売却申請の却下

冒頭で述べたように、河口慧海に取材した清見は、ブッダガヤでの天心への土地売却に同意したマハントが、州政府にそれを願い出るが、しかし、外国人への土地売却を認めない役人との板挟みとなり、「認可を得るために政府の上層部にどう接近したらよいかも自分には全く分からない」という嘘の言い訳で、「上司の命令に藉口して、上手に遁げしまった」と、指摘する。その根拠として清見

が引用するのは、土地売却の不許可の知らせをマハントから聞いて、「天心は怒って総督府の外務部に抗議を提出したが、同部からの回答は売り下げ禁止の命令など発したおぼえなしとのことだった。」という、河口の証言であった。

すなわち、当局が「売り下げ禁止の命令など発したおぼえなし」と言っている以上、嘘をついているのはマハントの方で、それは総督府の命令にかこつけた、マハントの体の良い天心に対する断りの口実だった、ということになる。これが、河口慧海の証言に基づく清見の解釈である。

しかし、上記の史料から、この間の経緯をもう一度、整理してみると、それとは逆の状況が浮かび上がるようである。

というのも、タゴールの9月の書簡は、マハントへの翻意を促すために、地方役人の知り合いに、マハントへの通達を出すよう提案している。すると、そのマハントが、河口の証言のように嘘をついていたとしたら、「禁止の命令など発したおぼえなし」という総督府の回答を携えた天心は、もっと強くマハントと交渉することができたと思われる。しかし、この時の天心は、すぐにそのままナーランダーの仏跡巡りの旅へと出立するので、あまりにあっけなく、その計画を諦めてしまった様にも見える。しかし、マハントから土地売却の却下の詳細を聞かされるのが4月ではなく、この8月の会談であったとしたら、この状況を逆に見ることが可能だろう。

すなわち、最初の訪問でマハントから土地売却の同意を得た天心は、その後、カルカタに戻り、「マハントからの来簡」でそれが難しいという説明を受け、怒った天心は総督府に抗議する。しかし、それでは埒が明かず、タゴールの助言もあって、マハントさえ説得できれば計画が実現すると考て、天心は改めて8月にブッダガヤを訪れる。ところが、ここでマハントから聞かされるのが、「英国の地方官が同じ東洋の外国人に土地を移譲する

ことを絶対に認めないであろう」という役人による断りの経緯と、「政府の上層部にどう接近したらよいかも自分には全く分からない」というマハントの窮状だとしたら、その時の天心の落胆ぶりは、想像に難くないだろう。

というのも、この時のマハントの説明が事実であれば、「禁止の命令など発したおぼえなし」という総督府の説明こそが、土地の売却を許可したくない植民地政府による、体の良い天心への厄介払いであった、ということになるからである。ここで、土地の取得を諦め切れない天心が、更に交渉を続けようとするなら、天心は再びカルカッタに戻り、政府の役人にその却下の経緯を問い合わせることになる。しかし、天心はその総督府で、すでにそんな命令などは出していないと、門前払いを食わされていたのである。この騒動で、植民地政府に翻弄されていたのは自分自身であったと気が付いたとしたら、その時の天心の徒労感は、想像に余りあるだろう。

これらの状況は、この時の「売り下げ禁止の命令など発したおぼえなし」という当局の説明が事実とは異なり、「政府の上層部にどう接近したらよいかも自分には全く分からない」というマハントの言葉が、むしろマハントの窮状を正直に表現するものであった可能性を示唆している。「岡倉の夢は、かくて終わりを告げた」と記すシュレンドロナトの記述が4月ではなく、8月のマハントとの会見であったとしたら、その時系列は、ちょうど辻褄が合うだろう。だからこそ、天心の夢はこの時に「終わりを告げ」、むしろさばさばとした気持ちでナーランダーへの踏査行に、出発したのではないだろうか。

以上の検証は、しかし、なお仮説に留まるものである。総督府による「禁止の命令など発したおぼえなし」という回答がもし事実であれば、やはりそれはマハントの「あざとい計略」によって、天心の土地売却の問題がう

やむやにされた、ということの意味するだろう。反対に、総督府の説明が事実ではなく、イギリスの役人が「土地を移譲することを絶対に認めない」というマハントの説明が本当だとしたら、その場合には、ザミンダールとして正当に土地を保有するマハントによる売却申請を、一体どのような理由から植民地政府は却下したのか、ということが問われるだろう。最後に、この問題を検証してみたい。

(2) イギリス植民地政府の対応

天心によるブッダガヤでの土地購入の経緯を明らかにするためには、1891年に始まるダルマパーラの大菩提協会による土地買収運動と、それに対立する僧院領主マハントの対応、そして、ブッダガヤ問題が紛争化することを懸念する植民地当局の対応という多様な観点から、その背景を検証する必要がある³⁸⁾。特に天心がブッダガヤを訪れた1902年には、海外の仏教徒の支持という国際世論を背景に持つ大菩提協会のダルマパーラと、国内のヒンドゥー教団や地主勢力を背景に持ちダルマパーラの運動に反発を強めるマハントは、ブッダガヤ問題をめぐり、その対立を先鋭化させていた。イギリス植民地政府は、国際的なブッダガヤ問題への関心の高まりと国内のヒンドゥー教勢力への対応を迫られることで、宗教的争点には中立を守るという立場を掲げながら、結果としては二枚舌的な対応を採ることで、それぞれが三竊みのこう着状態を続けていた。その歴史的経緯は多岐に渡るため、ここでは1点だけに絞って、1902年の天心の土地購入について触れた、当時の英領インド政府首脳部の記録を参照したい。

天心がブッダガヤを訪問した約半年後の1903年1月に、ブッダガヤ問題へのそれまでの英領政府の対応について調査を命じた時の総督カーゾンに対し、ベンガル副知事代行ボーディロンは、次のような報告を行っている³⁹⁾。

38) その経緯については、より詳しくは、拙稿を参照されたい [外川 2016]。

ごく最近、ブッダガヤのマハントが、日本人の巡礼者のためのレストハウスを建設するために、ひとりの日本人紳士にその土地の一角を貸与する許可を求める申請を行った。政府は、しかしながら、それはブッダガヤにおける利害関係の複雑化を招くので、望ましいことではないという判断に至った。ベンガル副知事は、この提案されているレストハウスについては、建設されるべきではないという見解を、パटना州長官に伝達したところである。

この記録は、英領インド政府が、天心によるブッダガヤでの土地買収の計画を詳細に把握していた事実を示している。それはガヤ県長官オルダムの特権を超える問題として、パटना州長官に報告され、その対応が協議されたがそれでも判断が付かず、上級官庁のベンガル管区副知事ジョン・ウッドバーンの裁可を仰ぐことで、最終的に、土地の買収申請を却下するという判断が下された、という経緯を伝えている⁴⁰⁾。

天心によるこの土地買収の試みは、その後、ブッダガヤ問題の歴史的係争について強い関心を抱くカーゾン総督にも報告され、日本人による新たなブッダガヤ問題への関与として、記憶に留められることになるのである。

ここから明らかになるのは、「売り下げ禁止の命令など発したおぼえなし」という総督府の回答にもかかわらず、植民地当局は、日本人のブッダガヤでの土地買収の経緯を注視

し、その扱いは植民地政府の上層部で慎重に検討されていた、という事実である。それは、イギリス植民地政府が、単に「外国人に土地を移譲することを認めない」という理由からではなく、ダルマパーラとマハントとの対立が先鋭化し、すでに政治問題化していることを背景に、仏教の聖地をめぐる対立が日本人の介入によってさらに複雑化しないようにという、ひとつの政治的判断によるものであったことを示している。

これを裏返せば、法的には正当な土地の所有権者であるマハントに認められた土地売却の申請にもかかわらず、それを却下しなければならないほどに、天心の計画には微妙な政治的問題が含まれていると、当局が判断したことを意味するだろう。

7 まとめ

本稿で検証した史料から、天心によるブッダガヤ訪問は、インド探訪の最初の訪問先として選ばれ、8月までに継続して3度に渡り訪れ、しかも第一回と第二回の訪問では、それぞれ一週間を掛けた滞在となっている状況が明らかとなる。それはインド滞在中の天心にとって、ひとつの一貫した意図に基づく活動であったことをうかがわせるだろう。

また、ヴィヴェーカーナンダとマハントとの対話が示しているのは、敬虔で物腰も穏やかな地域の宗教者が、近代ヒンドゥー教の改革運動の旗手ヴィヴェーカーナンダとの信頼

39) Memorandum by the Bengal Government with notes by Mr. J. A. Bourdillon. Letter from His Honour Mr. J. A. Bourdillon, C.I.S., Acting Lieutenant-Governor of Bengal, dated 9th January 1903. Curzon Collection, Indian Archaeology (CCIA), Part II, p. 227, Mss, Eur, F111/620, 1899-1905, British Library.

40) マハントから日本人への土地譲渡の申請について照会するガヤ県長官の手紙が、パटना州長官からベンガル副知事の裁可を仰ぐためにベンガル政府に転送された経緯は、以下に見ることができ。Tabulars Statement of Matters of routine for the month of December 1903, Government of Bengal, Judicial Department. Number of Proceedings 444-445, Proposed grant of a Plot of Land by the Mahant of Bodh-Gaya., File formula; J. 5B/1 3-4, 20th December, 1903, IOL/P/6569; Provision Proceedings; Judl. B Nov. 1902, Nos. 942 to 944, IOI/P/6325; Provision Proceedings; Judl. B Nov. 1902, Nos. 942 to 944. IOI/P/6325; File formula J. 5B/1 1-2, 27th September, 1902, British Library.

関係を結び、その宗教思想に共鳴してゆく経緯であった。大菩提協会の記録を通して描かれた強権的なイメージとは対照的なその姿は、ブッダガヤ復興運動が進まない理由を、もっぱら頑迷固陋なマハントのせいだとするダルマパーラの説明に、再検討を迫るものとなるだろう⁴¹⁾。

これらのことから明らかとなるのは、「高度に芸術的な夢」という審美的な理想を追求する天心像ではなく、しかし、「大アジア主義の先覚」としての革命運動家としての天心像でもない、天心がインド社会との交流を通して、国際的な仏教復興運動の渦中にあった当時のブッダガヤ問題への関わりを深めてゆく経緯であった。

その天心のブッダガヤへの関心については、少なくとも堀岡の述べるような、「巡礼村の計画」という牧歌的な理由だけでは、どうして植民地政府首脳部が天心の計画を慎重に検討し、不許可の命令を出すに至ったのかを説明するには十分ではないだろう。また、アジアの解放をめざす革命運動家という伝説的な天心像からは、なぜブッダガヤに日本人のための巡礼宿を建設する必要があったのかを、説明することは難しいだろう。ここでは、インド知識人との交流とブッダガヤ復興運動への関わりを通して構想される、明治日本の知識人による、アジア認識のひとつの可能性が提示されていると考えられるのである。

しかし、天心による土地取得の試みは英領政府によって却下され、帰国後の天心によってそれが言及されることもなかったので、本稿の史料だけでは、なおその全体像を論じることは困難である。レストハウス計画を通して天心が、どのような「東洋の理想」を追求しようとしていたのかは、今後の残された史料の精査を通して、さらに検証を続けてゆく必要があるだろう。

参 照 文 献

- Bharucha, Rustom. 2006. *Another Asia: Rabindranath Tagore & Okakura Tenshin*, New Delhi: Oxford University Press.
- Cunningham, Major-General Sir A. 1892. *Mahabodhi, or The Great Buddhist Temple under the Bodhi Tree at Buddha-Gaya*, London: W.H. Allen
- Daly, F. C. 1981. *First Rebels: Strictly Confidential Note on the Growth of the Revolutionary Movement in Bengal*, edited with notes & introduction, Sankar Ghosh. Riddhi-India.
- Datta, Mahendranath. 1953. *Kashirdhame Swami Bibekananda*, Mahendra Publishing: Kolkata. (Bengali)
- Dharmapala, Anagarika. 1917. *The Arya Dharma of Sakyamuni, Gautama, Buddha, or the Ethics of Self Discipline*. Calcutta: the Maha Bodhi Society.
- Gangopadhyay, Sunil. 1996. *Prothom Alo*, Kolkata: Anand Publications.
- Ghosh, Nareshchandra. 2012 [1989]. *Smritit Aloye Swamiji*, pp. 268-286, Swami Purnatmananda (ed.), Kolkata: Udbodhan Ashram. (Bengali)
- Heehs, Peter. 1993. *The Bomb in Bengal: The Rise of Revolutionary Terrorism in India 1900-1910*, Oxford: Oxford University Press.
- Horioka, Yasuko. 1963. *The life of Kakuzō, Author of the Book of Tea*, Tokyo: Hokuseido Press.
- Kowshik, Dinkar. 2011. *Okakura, The Rising Sun of Japanese Renaissance*, 2nd edition. New Delhi: National Book Trust.
- Lamb, Alastair. 1959. Some Notes on Russian Intrigue in Tibet, January, Vol. XLVI, pp. 46-65. *Journal of the Royal central Asian Society*.
- MacLeod, Josephine. 2008. MacLeod, Josephine, in *Reminiscences of Swami Vivekananda*, Kolkata: Advaita Ashrama (*Prabuddha Bharata*, December, 1949)
- MacPherson, D. J. 1921. *The Great Temple of Buddha Gaya: Judgment by Mr. MacPherson, D. J.*, Calcutta: The Maha-Bodhi Society.
- The Maha Bodhi Society. 1935. *Buddhagaya Temple: Proposed Buddha Gaya Temple Act, 1935, Congress and Hindu Maha Sabha Report, and View of Prominent Indians and Europeans*, Calcutta.
- Mitra, Rajendralala. 1972. *Buddha Gaya: The Great Buddhist Temple, the Hermitage of Sakya*

41) 本稿の課題に照らして見ると、特にヴィヴェーカーナンダを媒介とした天心とマハントとの関係が重要になると考えられるが、この点については、ダルマパーラのその後の活動の顛末も含めて、稿を改めて論じる必要があるだろう。

- Muni, Delhi: Indological Book House.
- Pal, Prasant Kumar. 1982-2003. *Rabijibani: 1861-1926*, Vol. 1-9, Kolkata: Ananda Publication. (Bengali)
- Poppowell, Richard J. 1995. *Intelligence and Imperial Deffence: British Intelligence and the Defence of the Indian Empire 1904-1924*. London: Frank Cass.
- Sangharakshita, Maha Sthavira. 2014. *Flame in Darkness: The Life and Saying of Bodhisathva Anagarika Dharmapala*, Kolkata: Maha Bodhi Society of India.
- Sarkar, Sumit. 1973. *The Swadeshi Movement in Bengal: 1903-1908*, Delhi: People's Publishing House.
- Singh Bahadur, Rai Rai Anugrah Narayan. 1892. *A Brief History of Bodh Gaya Math*, District Gaya, under the orders of G. A. Grierson, Calcutta: Bengal Secretariat Press.
- Swami Nikhilananda. 1942. *The Gospel of Ramakrishna*, New York, RV Center.
- Tagore, Abanindranath. 1961. Reminiscences', *The Journal of the Indian Society of Oriental Art*, November, pp. 43-45.
- Tagore, Surendranath. 1938. Some Reminiscences: Kakuzo Okakura, *The Visva-Bharati Quarterly*, Vol. II, August, pp. 65-72. (「ある回想」山口静一訳, 『岡倉天心・人と思想』橋川文三編, 1982年, 平凡社)
- Thakur, Rabindranath. 1939-1982. *Rabindra-Racānābhāṣī*, (RR), Vol. 1-30, Santiniketan: Visva-Bharati University.
- . 1942-2004. *Cithipatra*, Vol. 1-19, Santiniketan: Visva-Bharati University. (Bengali)
- The Eastern and Western Disciples. 1912-2001. *The Life of Swami Vivekananda*, Vol. 1-2.
- Trevithick, Alan. 2006. *The Revival of Buddhist Pilgrimage at Bodh Gaya (1811-1949): Anagarika Dharmapala and the Mahabodhi Temple*, Delhi: Motilal Banarasidass.
- 稲賀繁美 2002 「岡倉天心とインドー越境する近代国民意識と汎アジア・イデオロギーの帰趨」モダニズム研究会編『越境する想像力』人文書院, pp. 76-102
- 2005 「シスター・ニヴェディタと岡倉天心における越境と混淆『母なるカーリー』, 『インド生活の経緯』と美術批評の周辺ー天心滞インド期の著作へのあらたな洞察」『表現における越境と混淆』井波律子・井上章一編 国際日本文化研究センター
- 2014 『絵画の臨界ー近代東アジア美術史の枢樞と命運』名古屋大学出版会
- 上原芳太郎編 1937 『新西域記』上・下巻, 有光社
- 白田雅之 1981 「ブリヤンバダ・デービーのこと」『岡倉天心全集・月報』No. 8, pp. 5-8, 平凡社
- 岡倉一雄 1971 『父岡倉天心』中央公論社
- 岡倉古志郎 1987 「天心とベンガルの革命家たちー「東洋の覚醒」における天心のインド観をめぐって」『東洋研究』81号, pp. 1-45. 大東文化大学東洋研究所 (この論文は, 後に, 『祖父 岡倉天心』, 岡倉古志郎著, 中央公論美術出版, 1999年に収録される)
- 岡倉登志 2006 『世界史の中の日本ー岡倉天心とその時代』明石書店
- 2013 『曾祖父・覚三・岡倉天心の実像』宮帯出版社
- 岡倉登志・岡本佳子・宮瀧交二 2013 『岡倉天心・思想と行動』吉川弘文館
- 岡倉天心 1979-1981 『岡倉天心全集』全9巻, 平凡社
- 岡本佳子 2008 「ラビンドラナート・タゴールと岡倉覚三(天心)ーナショナルリズムをめぐってー」『アジア文化研究』(別冊17), pp. 49-75. 国際基督教大学アジア文化研究所編
- 2013 『般若波羅蜜多会』をめぐる人間模様』『岡倉天心・思想と行動』岡倉登志・岡本佳子・宮瀧交二編, 吉川弘文館
- 2014 「仏教をめぐる同床異夢の旅路ー岡倉覚三とスワームィー・ヴィヴェーカーナンダの出会いと別離」『岡倉天心ー伝統と革新』, pp. 65-83. 大東文化大学東洋研究所・岡倉天心研究班編著
- 春日井真也 1971 「インドと日本(四)ー堀至徳の思想と生涯(一)」『佛教大学研究紀要』55号
- 1972 「インドと日本(五)ー堀至徳の思想と生涯(二)」『佛教大学研究紀要』56号
- 1981 「岡倉天心の果たした役割」『インドー近景と遠景』同朋舎出版, pp. 121-160.
- 金子敏也 2007 『宗教としての芸術ー岡倉天心と明治近代化の光と影』つなん出版
- 黒野耐 2003 「第二次日英同盟と国防方針」, 『防衛研究所紀要』5(3), pp. 66-95.
- グルンフェルド, A・トム 1994 『現代チベットの歩み』, 八巻佳子訳, 東方書店
- 佐藤哲朗 2008 『大アジア思想活劇ー仏教が結んだ, もうひとつの近代史』サンガ
- 佐藤良純 2013 『ブッダガヤ大菩提寺ー新石器時代から現代まで』山喜房佛書林
- 外川昌彦 2010 「ヒンドゥー教ー植民地主義的構築説をめぐって」『南アジア社会を学ぶ人のために』, 田中雅一・田辺明生編, 世界思想社, pp. 104-115.
- 2012 「岡倉天心のインド体験ータゴール, ヴィヴェーカーナンダ, 堀至徳との

- 交流から」日本南アジア学会・東京外国語大学大会・要旨集（2012年10月7日）
- 2013 「タゴールとノーベル賞受賞の100年—二つの『ギターンジャリ』をめぐって」『文学』岩波書店，2013年11・12月号，pp. 119-138.
- 2014a 「シャンティニケトンの岡倉天心—1902年の英領インドにおけるタゴールとの出会いについて」『南アジア研究』第25号，pp. 31-44.
- 2014b 「岡倉天心とヴィヴェーカーナンダの交流—日印文化交流の源流」(1)～(4)『不滅の言葉』5, 7, 9, 11月号，Vol. 55, No. 3-6, pp. 68-77, pp. 23-29, pp. 22-26, pp. 35-38, 日本ヴェーダーンタ協会
- 2016 「ダルマバーラのブッダガヤ復興運動と日本人—ヒンドゥー教僧院長のマハントと英領インド政府の宗教政策を背景とした」『日本研究』第53集，pp. 189-229. 国際日本文化研究センター
- 平野久仁子 2009 「ヴィヴェーカーナンダのヒンドゥー教：—1893年万国宗教会議での演説をめぐって—」『南アジア研究』(21), 87-111.
- 2013 「ヴィヴェーカーナンダの「ブッタ」観—ヒンドゥー教復興運動における理念をめぐって—」『上智アジア学』29, 上智大学アジア文化研究所
- 堀岡弥寿子 1974 『岡倉天心—アジア文化宣揚の先駆者』吉川弘文館
- 1982 『岡倉天心考』吉川弘文館
- ワタリウム美術館編 2005 『ワタリウム美術館の岡倉天心・研究会』右文書院

原稿受理日—2016年7月13日

付 記

本稿の作成に当たり，稲賀繁美先生には，貴重なご助言を頂きました。本稿は，JSPS 科研費 16K02602 の成果の一部です。